

の理想に達するを極限の目的とするものならずや。然るを、この高尚の天地より引落して、現實的の國家主義、而も一層狹隘の國家主義に銜せんとす。誰れか、此に對して憤懣せざる者ぞ。

余輩は嘗て、六の觀音の御籤（元錢六枚を錯雜せしめ、是を表裏して排置え、其の表裏の様に依りて運を決する者なり）なる者を試みしことあり。曰く、汝の事業は圓形の器に、方形の蓋を入れんとするか如し。蓋、無理なり。と余輩此論を草えて、大方の士君子に呈するは、或は不合理なる議論なるべし。然れども、現時の國家主義者、文學を其主義に投入せんとするは、豈に此般の類ならずや。文學の特質根本を削除切斷するに非ずんば、如何にして之を合格せんとするか。例令此を抑壓填充せしめたりとするも、此般の文學果えて世に幾何の價值ありや。余輩は實に、現時の狹量的國家主義を排斥攻撃せざるを得ざるなり。是實に、日本將來の文學の一大禍害なればなり。時事に感じて、此文を草す、讀者幸に、書生の暴論となすこと勿れ。

（明治廿八年九月稿）

雜 錄

羽柴秀吉書翰

攝津國梅林寺藏

講師 武藤虎太

只今の殿迄打入候之處御狀披見申候今日成次第ぬま迄通申候古左へも同前候

自是可申と存刻預示快然候仍只今京より罷下候者慥申候上様并殿様何も無御別儀御きりぬけなされ候ぞ、この崎へ御のきなされ候内に福平左三

度つきあひ無比類動候て無何事之由先以目出度存候我等も成次第歸城候
條猶追々可申承候其元之儀無御由斷御才覺專一候恐々謹言

羽 筑

六月五日

秀 吉（華押）

中瀬兵

御返報

本書は、秀吉高松城退陣の際、途中野殿より中川清秀に答ふる所に係り、從來秀吉退陣の事を録せる簡冊の誤を正すべく、且つ秀吉の倉皇變に趨きし情況一斑を窺ふに足れり。今之を考ふるに先ち、高松城攻圍の景況と、毛利家熹和の始末を略述すべし。

天正十年の春、秀吉信長の命を奉し、兵數萬を率て、中國を攻め、連にスクモ塚、河屋、冠の諸城を陥れ

備前軍記

○豐鑑四月備中の高松城に傳く、此城や三面沼澤を控へ、人馬通し難く、一面巨濠を帶び、水深くして

容易に踰ゆ可らず、要害堅固、誠に毛利の堅城なり。

秀吉事記
太閤記

然れども、蜘蛛津川、エッタ川等の會する所

にして、此等の川は、下流並に河邊川に入る。地勢低下、水潦瀦り易し。秀吉徐ろに地理を按し、水攻法を用ひ、門前村より蛙カ鼻迄、太約一里の長堤を築て水を支へ、以て城中に注ぐ、實に五月上旬なり。時恰も梅雨に属し、大雨三日、河渠暴漲、瀦水氾濫、既に城壁を浸す。秀吉又別に備前の山水を導て之を高松に注かしむ。是に於て、舍宅波に漂ひ、簀を編み、板を双べ、城兵大に苦む。

高松城攻物語
太閤記
秀吉事記
毛利

輝元城兵の急なるを聞き、小早川隆景、吉川元春と共に兵數萬を率て、備中國釋迦カ峰不動カ嵩に陣す。然れども、河を隔るを以て直に域兵と通する能はず、徒に日を送るのみ。

吉川元春の今田經高に與ふる六月二日の書に高松の城、水を仕掛候て下口をつき塞き責申候條何共自此方の加勢も城内頼に不成候て日々無心元計候云々を見ゆ。

斯て高松城圍を受る連旬、其水に溺れざる僅に數尺、將士大に苦む、而して日幡の守將上原某の如き、

遂に歟を秀吉に納る。毛利家日記○萩藩閩閩錄○秀吉事記○清水長左右衛門事等に據る是に於て安國寺惠瓊をして和を秀吉に求めしむ、秀

吉答て曰く、二國の疆域、伯耆の矢走川、備中の河邊川を以て境とし、宗治をして自殺して城を納れしめば、以て信長に報するに足ると。輝元聞て曰く、疆界は命に従はん、功臣を殺すは情忍ふ所に非ず

と。萩藩閩閩錄○毛利家日記

是より先、秀吉毛利氏の大軍を率て至るを聞き、書を信長に馳せて事を報し、且つ援兵を出さんと請ふ。信長大に悦び、池田信輝、堀秀政、中川清秀、高山重友、長岡忠興等をして、各其國に就て西征の裝を整へしめ、自ら行て秀吉を援けんと欲し、子信忠と共に京師に上り、三條本能寺に陣す、(信忠は妙覺寺に宿す)。而して明智光秀亦俄に徳川氏接待を止めて中國應援の命に接す。秀吉事記○太閤記○織田家譜○豐鏡然れど

も、光秀居常信長に嫌焉たらざるものあり、是に於て、俄に異心を生し、坂本より直に龜山に至り、六月朔日夜半兵を信長に觀めすと稱し、蓮城院日記進て大江の坂を越へ、明日黎明本能寺を襲ひて信長を弑す、子信忠妙覺寺に在り、變を聞て二條城に據り、又光秀に殺さる。豐鑑○信長記○太閤記○公卿補任○多聞院日記○三河物語○言經卿記○兼見卿記○蓮成院

日記○本願寺日記○古今消息集○武家事記○毛利家記○秀吉事記○江系譜

この飛報三日に秀吉の許に達す、(太閤記明良洪範は三日子の刻と爲し、毛利家日記、秀吉事記、武家

事記は三日晩とし、江系譜は三日晝とし、當代記及び古今消息集には四日に作り、豐鑑には二日夜とす、二日早朝の變なれば如何に急使とするも即日高松に達するの謂はれ無し、京都より高松迄約五十里、徳川幕府時代の宿驛、急飛脚と雖ども一日の行程には餘りあり、然れども之を以て四日に係るは少く遲きに過るか如し、尤も三日の夜遅く達せたらんには、或は四日の朝と爲りてやも計られず、要するに曉と云ひ、晩と云ふも大略を云ふのみ、されば三日と定むるも不可無らん乎。秀吉大に驚く、然れども、秘えて發せず、益々警戒を嚴にし、秀吉事記直に西國の通路を扼し、明智の密使を捕へしむ。備前軍記（備前軍記、陰徳太平記、常山記談には更に明智より毛利に遣はせたる飛脚を庭瀬にて捕へ、其書を奪ひたりとあり、日本野史亦之に従ふ。然れども事少しく穿鑿に過るが如し、尤も是等の書は往々誤謬を傳ふるも、其往來を偵察するが如きは、當時必ず之れ有りてならん、今故に取る。）

四日、惠瓊又至り、輝元の辭を致す。峰須賀家政、生駒親政等皆曰く、近國將士既に款を納れ、上原亦通す、速に和せずんば不測の禍を買はんと。當時秀吉の心既に竊に和を希ひしならん、惠瓊乃ち城に入り、事を宗治に告ぐ。是より先、宗治、輝元の書を得、進退維れ谷より大に憤慨せしが、

長左衛門由來記に宇多田小四郎と云者忍て城内に入り竹の筒より輝元公隆景公よりの書を出し長左衛門へ相渡す其事の趣は猶今に加勢不相叶候條信長へ味方候へとなり長左衛門御返事にさりとは無是非御意に候云々あり閩關錄所載の宇治事蹟には宇多田使の意は清水兄弟の忠節を好みすあり要するに毛利家救援の道無きを報せるものにして當時宗治の心中察すべきものあるを知るべし。

是に於て、喟然として嘆きて曰く、吾れ一死以て兩家を和す可んば、則當に命を聽くべしと。長左衛門由來記に閩關錄四日、兄月成及び末近信賀と共に城を出て舟中に自殺す。萩藩閩關錄（武家事記に四日を六日と云、豐鑑に二日の朝とするか如きは誤にして、閩關錄載する所甚た炳焉たり。曰く

末近左衛門尉信賀

天正十年六月四日、備中高松城落去之刻、清水長左衛門宗治一同に立御用申候

乃ち杉原七郎左衛門をえて代て城に入らしむ。浦上字喜多記此日、秀吉、輝元、元春、隆景と誓書を交換

す。毛利家の書今傳はらずと雖も、秀吉の三氏に宛てたるもの、今尙毛利家に存す。其文に曰毛利家什書

起請文之事

一被對公儀御身上之儀我等請取申候條聊以不可存疏略事

一雖不及申候輝元、元春隆景深重無如在我等懸身體見放申間敷事

一如斯申談上者表裏拔公事不可有之事

右之條々若偽於有之者、忝モ日本國中、大小之神祇、殊八幡大菩薩、愛宕白山
摩利支天、別而氏神御罰、可罷蒙者也、仍起請文如件、

天正十年

羽柴筑前守

六月四日

秀吉（血判）

輝元○江系譜所載毛利
右馬頭殿と有り

吉川駿河守殿

小早川左衛門佐殿○武家事記江系
譜所載並に同文

秀吉の迅速なる措置は、幸にも破綻を生せずして誓約を訂成し、其翌日を以て直に明智征討の途に上ることを得たり。此狀は則高松出發の日、途中にて清秀の書を得、これに答へたるなり。然るに、此誓約の事に就て、蜂須賀家記、池田家譜集成、浦上宇喜多等に再度和議訂盟の際は、信長遭難の事を毛利家に告げ、是にても和議有べきや否や返答有るべしと申送りたる故、毛利家にては種々評議の末、隆景の議に由り、義を重んじて遂に和を講ずとあり。然れども、是れ秀吉を過重したるものにて、秀吉の初より信長の死を秘したることは、老人雜話に

高松城に取懸り水攻にし既に落城せんとする時明智謀叛の事注進あり此故に和議して大將斗切腹し諸家を助けられたり中略明智事注進有しを太閤のみ知れり敵方も聞たりと云は非なりと有り。是れ實に至當の言なるべく、且つ吉川家什書中、吉川廣家の毛利輝元に贈れる書に

先年高松之城太閤様御攻之刻信長御生害之故當方御和平被仰談御陣可被打入之節從肥前雜賀信長不慮之段慥に申候下々申様は此時手を返矛盾に及候は、天下即時に可被御存分の所を隆景元春御分別違候と各被申候得共前日神文被取替候辻無忘却被相屈之段太閤様御感候而其故御當家于今如此安堵之段隆景折々御物語候云々

と有るを見れば、誓約訂成の翌日、信長の變報毛利陣中にも達し、其將士起て之を襲はんとしたるを、元春、隆景義に伏て之を止めたるを知るべし、況や秀吉の誓紙にも公儀に對し云々と云ひ、拔公事不可有と云ひ、總て信長の現存せるか如く文言を認め、毫も之を露はさざるの意顯然たるに於てをや。秀吉如何に洒落なりと雖も、既に親近なる中川清秀にも實を告げず、焉ぞ京師の變を攄げ出して、以て敵に告るの拙策を學ばんや。但賤カ岳の戰と云ひ、若くは山崎合戰と云ひ、秀吉一生の成功は總て

迅速機敏の中より胚胎し來れるものゝ如し。則ち毛利誓約の如きも、敵の未だ知らざるに乘じて此れを締結したるは、全く迅速事を處し、機敏局を了したるの一として數ふべきものとす。

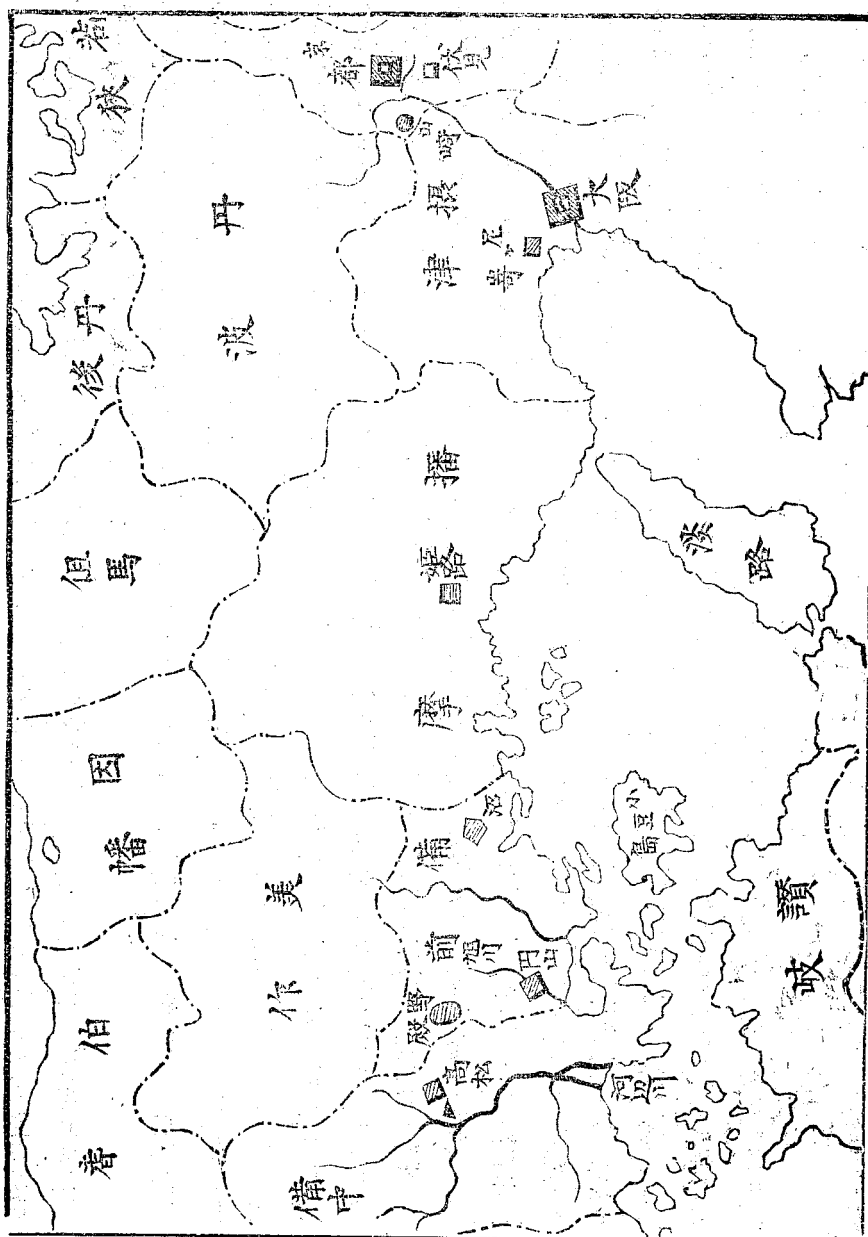
條約の訂盟成りし以上は、秀吉は一刻も遅くする能はず、直に京師に上る。是に於て、本文書を究むるの要起る。抑も秀吉の高松引拂に就ては、從來諸書多く之を六日に係く。(古今消息集は六日迄逗留とし、豐鑑、本能寺始末記、太閤記、秀吉事記、備前軍記、江系譜、浦上宇喜多記等皆六日とす。)但毛利家日記には翌日六月五日秀吉公并宇喜多を始め諸軍退去すとあり、又川角太閤記には

四日戌刻許に森勘八を召夜に入なは引退ものなりとあるに方ては勘八殘可申候其様子は信長公御切腹の報到來、毛利陣へも早く相聞可申候今朝の誓紙を破り可被付候事も尤に候云々

と見ゆ、是に由れば秀吉は四日早く誓約を終りたるを以て、猶豫せば信長の計毛利に達し、前約を破らんと測り難ければ、急に退て、一方には急に難に赴き、一方には毛利を去て破約の辞無らしめんと意には非るか。川角太閤記は往々誤謬を傳へ、確徵とは爲し難きも、此一條或は當に然るべきなり。而して本書に又

其夜四日暮合より備前の宇喜多八郎殿を戌の刻のかしらに御退被成候御身は夜の丑の刻に御引退被成候事

と有れば、秀吉は四日の夜既に装を整へ、深更に及び高松を發したるゝ如し、即ち本書は退陣の途中、野殿にて中川清秀の書を得て之に答へたるの書にして、五日の日附を以て「只今の殿迄打入候之處御狀披見申候」とあるは善く吻合するを見る。然るに諸書多く之を六日に係るは、蓋し當時秀吉は夥多の兵を率ひず、先づ左右の兵を率て急に發足せしなるべく、而して其全軍は翌六日にも退陣せしなる



べし。豐鑑元來秀吉は機を見るに敏なるを以て、袂を投して起ち、單騎先づ駈るが如き、往々見る所なり。されば是時も一般將士には遍く告くるに及ばずして、四日夜深更、若くは五日早天に出立せざるべし、則ち五日出發説は最早動かす可らず。

「自是可申と存刻示預快然候」とは、吾れ自ら報する所有らんと欲せしに、却て貴翰に按し欣喜拜誦せりとの意なり。是より先、五月十七日、中川瀨兵衛清秀は中國征討の命を受け、其邑攝津茨木に歸り、軍旅を整へし際、會々京師の變報に接し、傳聞の儘直に書を裁きて之を秀吉に報せり。然るに秀吉は是より先、業已に此を稔聞せしも、京畿近國の將士或は動搖せんことを恐れ、特に虚構の言を以て先づ其心を安せしめ、而て時日に移さず、已れ先づ京畿に赴て事を裁せんと欲せしなり。他日禍亂を戡定し、餘勢の激する所、鷄林八道を蹂躪し、支那四百餘州を聳動せたるの氣魄は實に其萌蘖を斯時に發せたりと云へきなり。「仍只今京より罷下候者云々」は秀吉の虚構にして、今京師より新來の使者確報を齎らて曰く、信長公父子何方も別條無く敵を切り拔け、膳所か崎へ退かれたり。(此に云せしか崎は近江の膳所を指すなるへし)「福平左三度つきあひ」云々の福平左は福富平左衛門を指すなり。是より先、秀吉尙微賤の時、美濃に戦ひ、武功の披露を福富平左衛門、村井所之助二子に請ひてとあり。太閤記信長本能寺に館せしや、福富も亦入京せり、蓋し信長左右の侍臣なるへし、故に秀吉も其心に浮みし儘、直に之を擧て其拒戦したるを云へるなり。果せる哉、信長既に死し、信忠群議を排して二條城に據らんとするや、福富平三、菅屋某は之に従ひ、共に二條城に據れり。信長記我等も成次第歸城候「云々は我れ亦急に姫路に歸るへし、卿等宜く舉措する所有れとて、徐に後圖を授けたり。

「の殿」は備前國津高郡平場山の麓に在り、吉備温故高松を距る二里餘。「ぬま迄通申候」のぬまは亦備前國

上道郡の一小村にゑて、高松を距る六里餘。西國街道の衝に當る。吉備而して秀吉は是日沼城に入れ

り、「古左へも同前候」とあるは古田重藏左助を云なり、左助は中川清秀の妹夫、天正六年十二月、荒木

村重の叛する時、信長に従て之を攻め、中川清秀と共に原田を成りゑことあり。後清秀功を以て、攝津

の茨木を得、而して古田左助は此時秀吉に従ひ、高松を攻めゑなるべし。信長記、太閤記、古左へのへは

衛に非ずして古左にも、若くは單に古左もと云と同一なるべし。之を要するに、秀吉の本文書を熟讀

玩味する時は、秀吉は姑らく將士の心を慰撫し、自ら急速歸城して後事を策せんと欲せるのこ。

秀吉既に沼城に入り、翌六日には姫路に着せゑものゝ如し。姫路は高松を距る廿六里餘なれば、其沼

城を距ること廿里餘なり、尋常の行程にしてハ一日に到達ゑ難きの感あり。況や犬風疾雨。河水氾濫、

道路の不便尠あらざるをや。是に於て、太閤記は七日沼滞在とし、古今消息集、備前軍記は七日姫路着

とし、黒田家譜、江系譜及び太閤記は八日姫路着とせり、秀吉事記には七日姫路着城とせるも、其高松

出發を六日とせるより茲に至るものにて、沼より姫路迄一日に着せりと爲すは是なるに似たり。

陣、

今豐鑑を按するに

誓紙の盟を固くしことなりぬれば六月六日秀吉播磨に歸り給ふ雨ふり川水出ゑを漸々にして凌ぎ

その夜に姫路に着き給ふ軍兵をくれ明る日着もあり着ぬもありけり

とあれば、姫路歸着は明に六日の夜とせり、又松井家譜に杉藤七の松井猪助に與ふる書を載するを見

るに、曰く

西國表之儀存分のまゝ、兩川小早川人質定ふに相定三ヶ國被相渡去六日に至姫路秀吉馬被納候云々。
 といれば其六日に姫路に着たるは明かなり、尤も其書に六月八日の日附と云て、追書に、尙々昨日
 人數を召しつれ先へ罷歸候條申入候以上とあるに照せば、七日姫路着と見ゆるも、己に本文に六日
 とある以上は、日附は一日を違ふも知る可らず、且つ秀吉高松出發の際は、頗る急速装束を束ねたり、さ
 れば何ぞ大風疾雨の爲に其行を緩ふせんや、尤も古今消息集に秀吉の齋藤玄蕃允に與ふる書を載せ
 て、「廿七里の所を一日一夜に姫路へ討入候事」と云へるは、秀吉誇張の言とするも、沼より姫路に至
 る廿里餘の路程は、晝夜兼行せば決えて達し難しと謂可らず。要するに毛利氏との和成るや、直に東
 装程に上り、暴風狂雨にも係らず、二日にして能く達したるは、迅速事を處するの秀吉に在ては、亦當
 に然るべきなり。

秀吉既に姫路に歸り、暫く將士を休め、九日未明再び出發○豐鑑○松井家譜○秀吉事記 十一日尼ヶ崎に着す、
 然れども織田信孝以下丹波、池田等諸將未だ至らず。則ち書を裁して之を招き、而して高山、中川等諸
 將亦た方畧の出る所なし。秀吉乃ち諸將を會して其向ふ所を部署し、○古今消息集 十二日天神馬場に着
 し、○豐鑑○太閤記 十三日には本邦史上義戰の一として數へらるゝ有名なる山崎の快戰あり、○太閤記 而
 て他年權柄を海内に振ひ、武威を海外に輝し、殆ど神功征韓當時の故に復せんとしたる掀天翻地の一
 大事業は、其萌芽實に此一戰に胚胎すと謂ふべし。